

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6

71
4209
2

第 號

安政見聞誌

冊數

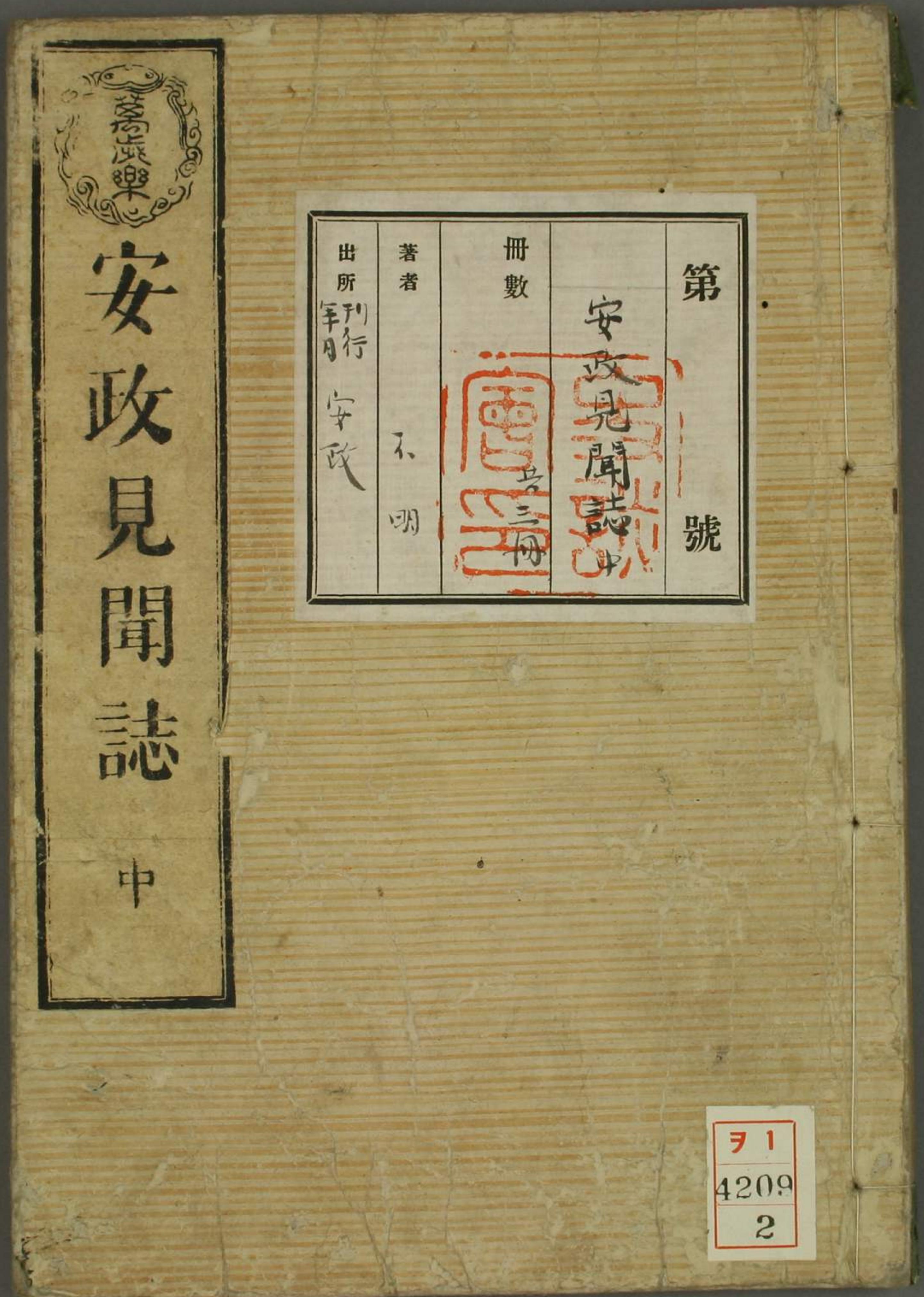


著者

出所 刊行年月 安政

不明

安政見聞誌 中



東晉書
卷之二十一

北東を向く。西多紅葉。

北寄をあづけ西寄江原
元老家中の平井連より依アリ戸二丁目東方ニ二軒易ヒ所曰此乃西酒
角子ノ内也方ニ有ル本長家セキホ京町二丁里俗云麿子中野中
もみ子而ち麿大根根也て號アリ其一系甚迹母家のがとト
アモキ

This image shows a horizontal strip of red ink seals, likely from a traditional Chinese book. The seals are arranged in two rows. The top row contains four seals, and the bottom row contains three seals. The characters in the seals are written in seal script (篆书), which is a stylized form of Chinese characters used for official documents and seals. The characters in the seals are: 1) 丁巳年 (Year of the Dragon), 2) 丁巳仲夏 (Mid-summer of the Year of the Dragon), 3) 丁巳仲夏 (Mid-summer of the Year of the Dragon), 4) 丁巳仲夏 (Mid-summer of the Year of the Dragon), and 5) 丁巳仲夏 (Mid-summer of the Year of the Dragon). The seals are rectangular with rounded corners, and the ink is a deep red color.

A red square seal impression with four characters in seal script, reading "中華書局藏書" (Collection of Zhonghua Book Company).

門牌
號4209
卷2



今度の延長を
 何州より無比萬
 陽より萬葉を考る
 の無化の物
 事あらゆる事
 是又後世のあら
 ば人のなまふう
 ふせん
 あまこう
 △日雨あ方太あちあ町と大ふ筋燒失日あく田中物も鐵色津家を多々
 △お東に大あむ繩大田作社被燒修房碑大破焼はき小角安町あす大筋
 烧失日あ
 △壱年半丁そかは是方萬葉多
 廿一 吉承月卒堀田丁被萬葉多例二丁袖相燒失日あ
 日西あの方ある町家大破燒失日あ
 廿二 日かあ方獨田門ま待燒失本社等天多居地燒失碑日あは寄承方民
 家多く當日雨堀陽舟海場萬方萬屋まで大門漆燒る日雨あ例燒失院法源
 ち大破燒失萬屋日雨あ丁と燒る日雨今事丁蓮窓寺跡もも其間もか堂
 破燒失方大破失外處多安昌も絲絹ち達れ多
 廿三 日雨今事堀陽今テ丁東側一丁燒る日雨例松林もか壱も慶壱も大
 破燒失多ト有ち院本物も碑燒失篤患御是私之件紀づく△日も方
 落堀砂利場跡も鐵一丁月日下免丁堀乳山萬方村方春くある

お吉原へ

五町とも漢波

多く船こう

一時は出来ぐく

遊女づりとよう

若人詠かうく死

ちう中子毎夜うす

人集接客せうちも

人数も多るに准て

烈きとひ人育人あく

よくも通出せーものう

遊女屋のうらみが京町であ

岡本橋は二丁目ね延年

角町筋徒屋江戸町

二丁目圖田伊勢屋

三浦岳古あらそひ別と

はかひすーく旅住客をども

正木焼死ーうす中すも三浦岳の

家すくへそとあを安樂を振り冗遊へ入き

助さんとせーよ大入で三みくやけ死ととく

都内焼死人まことにちう古百年金人

古都をヶ所めうきーもくやけのう

のうかと家へま町二丁目下のうに二三軒

れうう太門外幸方通西側の家跡つせぬ

かーのううえふらやうた金を助うんじち

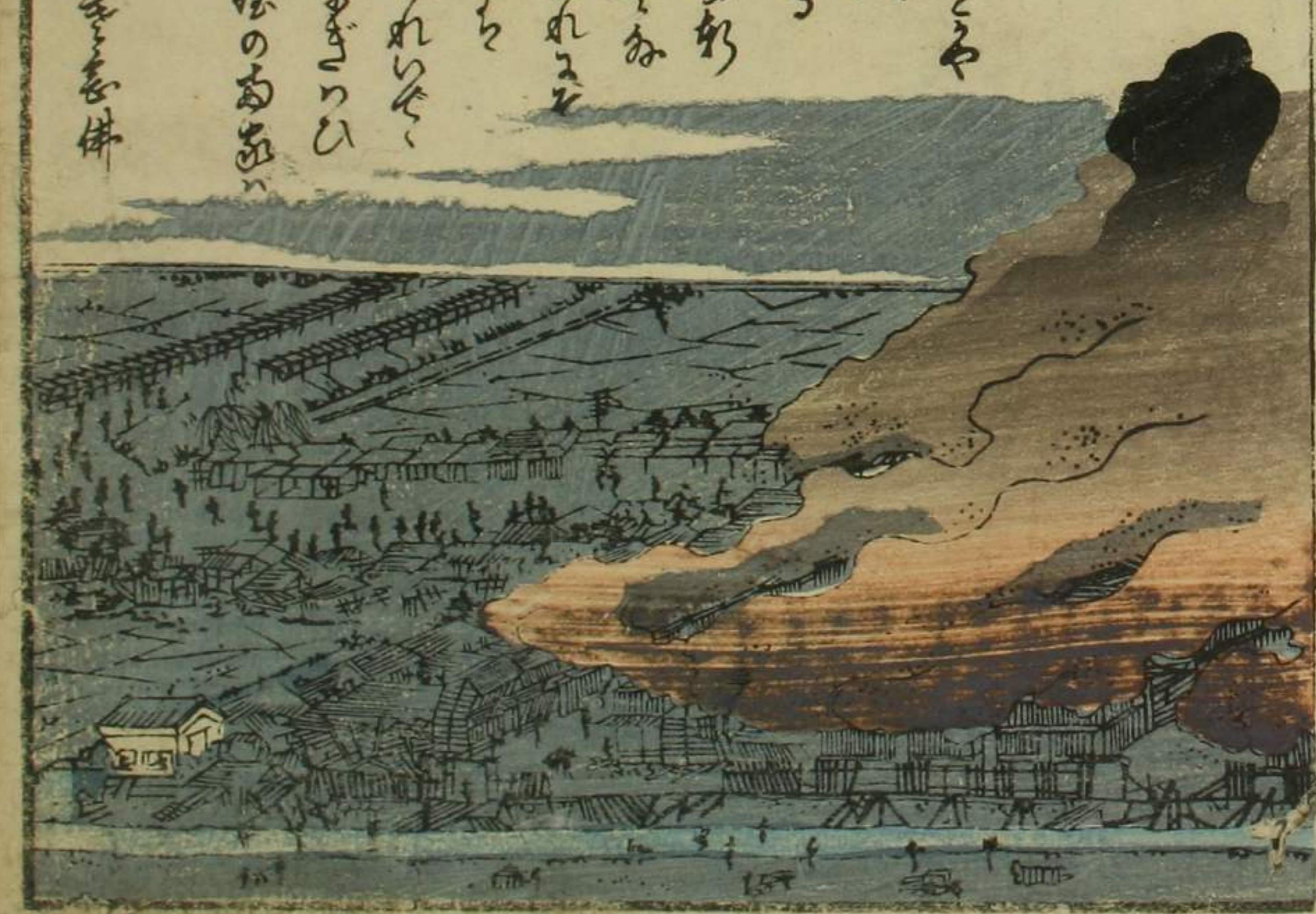
ゆうまーうとひーがたれまるとうのれりく、

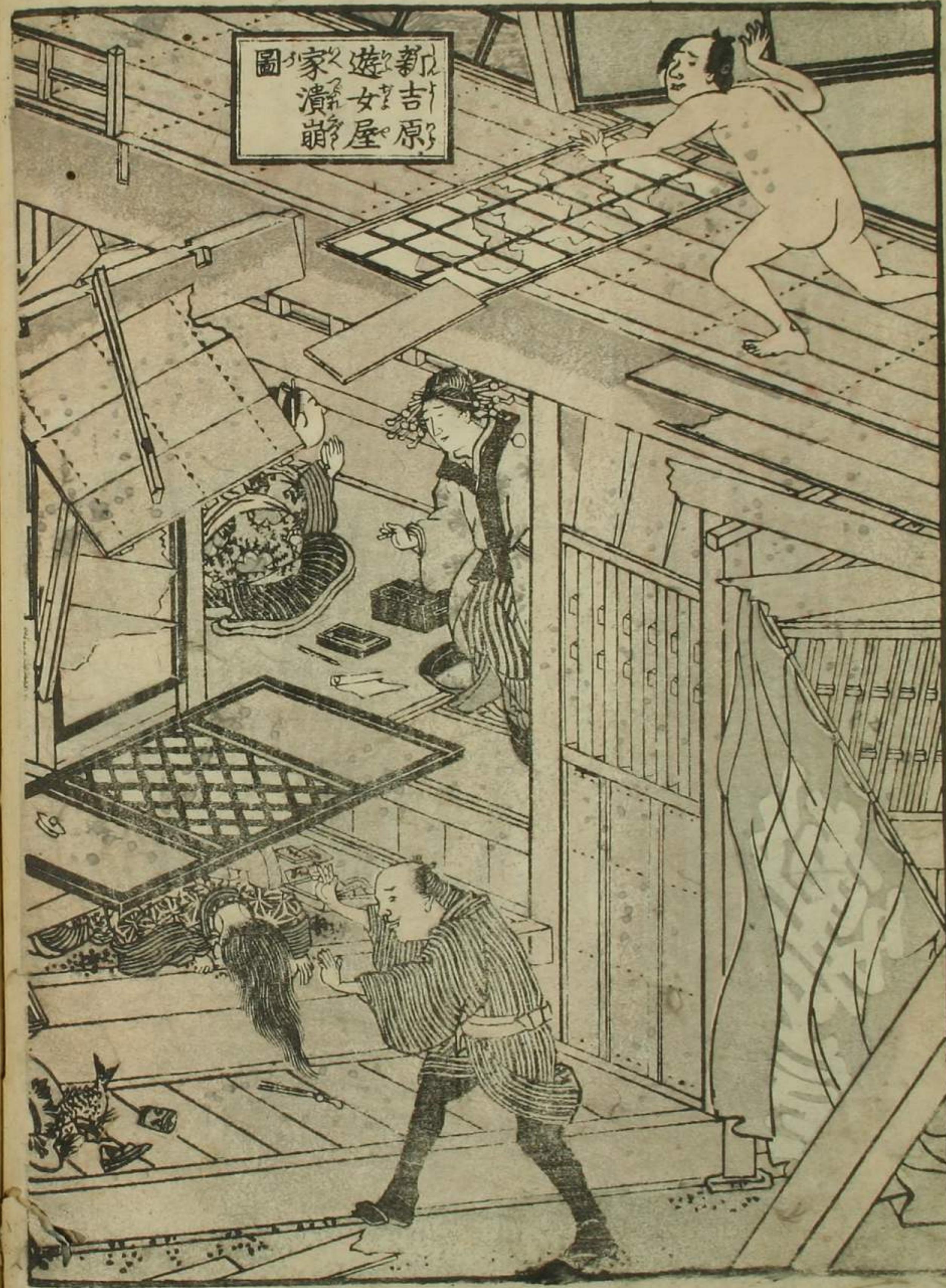
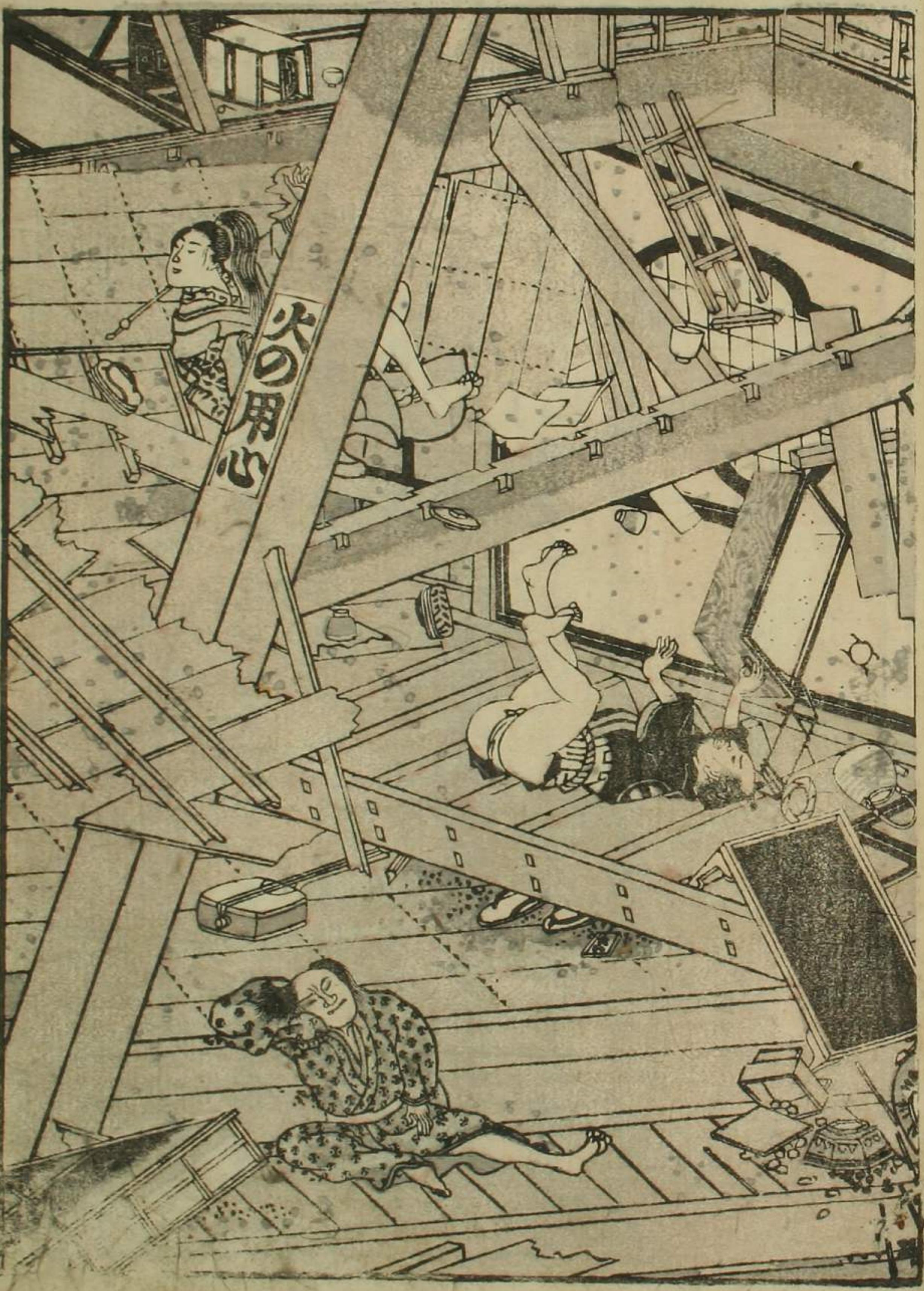
又仮くとせよ我ゆきのうきとよきりひ

はあくとくうす姿波老ゑね延年のある

ええさうう

氣くらふ曲篇のみちよ多喜佛





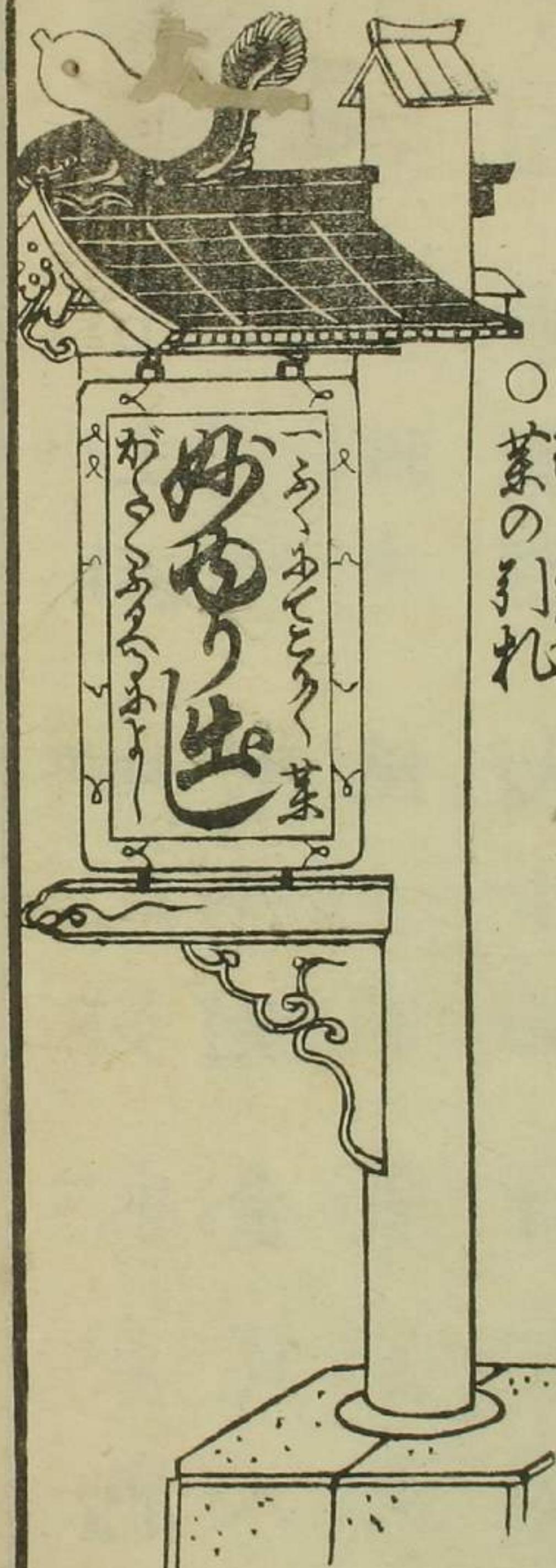
饭	新	本	借	現	貸	往	親	大
行	宅	贊	夥	金	費	起	地	火
燒	建	賑	空	少	新	裂	恐	動
疵	職	死	深	晝	暗	夢	火	市
閑	人	藝	驚	夜	每	埋	中	土
蕪	喜	治	光	動	寒	走	苦	逃
貧	医	長	水	仁	大	施	家	地
間	者	役	懲	道	非	止	行	亂
泣	開	儲	割	導	溢	固	榮	多
日	町	年	番	七	刀	庫	金	家
直	者	世	欲	紺	屋	勞	賀	氣
明	豊	麗	榮	大	賣	倒	入	崩

西 治ある乃道哲多摩源よう焼日西若中矢王もつあ代地丁山門工燒日所
あ方もぐえ嵩みて止る日あ方め御不二下少翁う支よう吉祥院る東達義
院庚申堂と命院地多、堂微ら院を勅院有る。又焉院中もお御きも數百
物の裏系參燒る日も元時某も疊々つあ居ゆる所まで燒る日向御ようあ方
ある所と二丁まさける右あ去乃後どう見ともか九丁余燒失
△沙草のがをと美徳を修房大被換へ立重太塔九輪曲る又日ある乃东御
みく又あ方毎天をもれ院而輕焉堂家清院善院富士文修焉院宣まゆ
妙神院と焼る日あ方函玉院廿二夜をとんたる堂燒り北四邊一の燈籠まで燒る
日改めゆきあちふく全副院是院法若院妙善院富士文修焉院宣まゆ
院地多をと燒る

附録

茲又地震後のまことに市中がさうあらざるうち甚方とさへいひる一枚粉絲
繪小やねんを數々面貰給余ふかまく後店をほこと商ひりのあり
皆はれも人こそそとてこれど來むるもじく公より内制禁のあざめの志
のぞく極板せよアじあらわれど大邊の警戒廣大すれば絶技の
後もまたにまれるものありありその一つを圖ふすゝするを
のちの後せむはくと向やのあくさめん従う

○薬の引れ



無事うきうち定よひよとせまやと

一作成身の事一今年の僕が老年便歎を罹るめでたれ先程は夢ゆくと
他をせりあらかゆ一切終り次第を奉徳より修業をうれねりア我
別て来未だ東海道を経てゆき度ア又に市を暮すをうれしかくゆつ仕
事と火多きどうとあきあらくうちの暮と行をめりどめア付ね方のうやう
ゆくはが寛さんあらアまだ萬月限りふやかや後日も遅出。挂布のひづるを
四要の義あるとひ更暁中よく家中を廻る。家を無病ニシテ山風ひて歎息
ひて殊難有ぬのうちの四事飛危へせむを若るあらうひだつましめやせうりつと
ウトの中と山神祭取下りのための經常形など

一目録は職人一組の手本木屋一軒をうふ車力一かみの目雇

一土蔵の粉一高利座一地面持一株のも一弓取一弓取一弓藝人參一體力一草木營館

○用様二弓を手とて夏木をやせあらびくゆく人ふとくと
人ふ用とて又せんぐるかたの用ふとせあまくべー

○本家取押社明所

町百年目

要屋石藏



新居原燒失舟遊女落後先之北山の宿本二十石を示御名のくまふに定
淡葉東仲町西仲町花川戸町山之宿町今戸町本通り深川ハ次代寺門前仲町
南馬道町田町山谷町今戸町本通り深川ハ次代寺門前仲町
中町東仲町佃町下松村町常磐町舟前橋並町八幡山移本
門内八郎云時屋安松井町本又本通の下入江町長崎町
猪又屋敷時屋安松井町本又内淡葉東仲町今戸町
山若山田町本移山田町本又内淡葉東仲町今戸町
移居者もとおひじしく家主春年
内國事あつてとをもうう

度よ出宿町役院せし江戸三丁目
佐野姫のた女僕如名へとゆき文母よ
別色人と多くは先づい室假直すとあ
かくやうとくお其の年とう益女あ
地裏れり
あじ妻ソノ娘とあんとくよけよびう
不景のわが
アのうる年福本三百金を統一の上に腰矣
ちの腰等はさう寧文母よとぞれにめおれとあつとぞ



而中雜十部

外良齋せりふ

御色から力で勤一の先達と申のゆうとすりませう江戸坐
船て千室の方餘勧相系一式町中古せだりへれどもしくあらや
お嫁も大波瀾波瀾人國の酒酒もゆく秋駄本を織成根故
うのう勤天翁と名を揚り只今水漏れ也とて庚申の方くせ
大通へり水僕や炭僕や安安せ處風障ふせが立付酒豆合も
酒舗を信どみ見るを折りへ親方拂のおりの方や申やト耶へ
たのこへ方ふ酒局をあられへ凍作りも裳作りも被風も替りも
さううと興味あるとそこそく物語引張そりやくへん
迦陵頻也か持て突立蓮せ引張そりやくへん
宣宗服體のじつ就も抱へるゆく親がふくらむ豪爽也の奇天球
の雨草のすまゆふらることほへ方引外へがらやこらみ所後

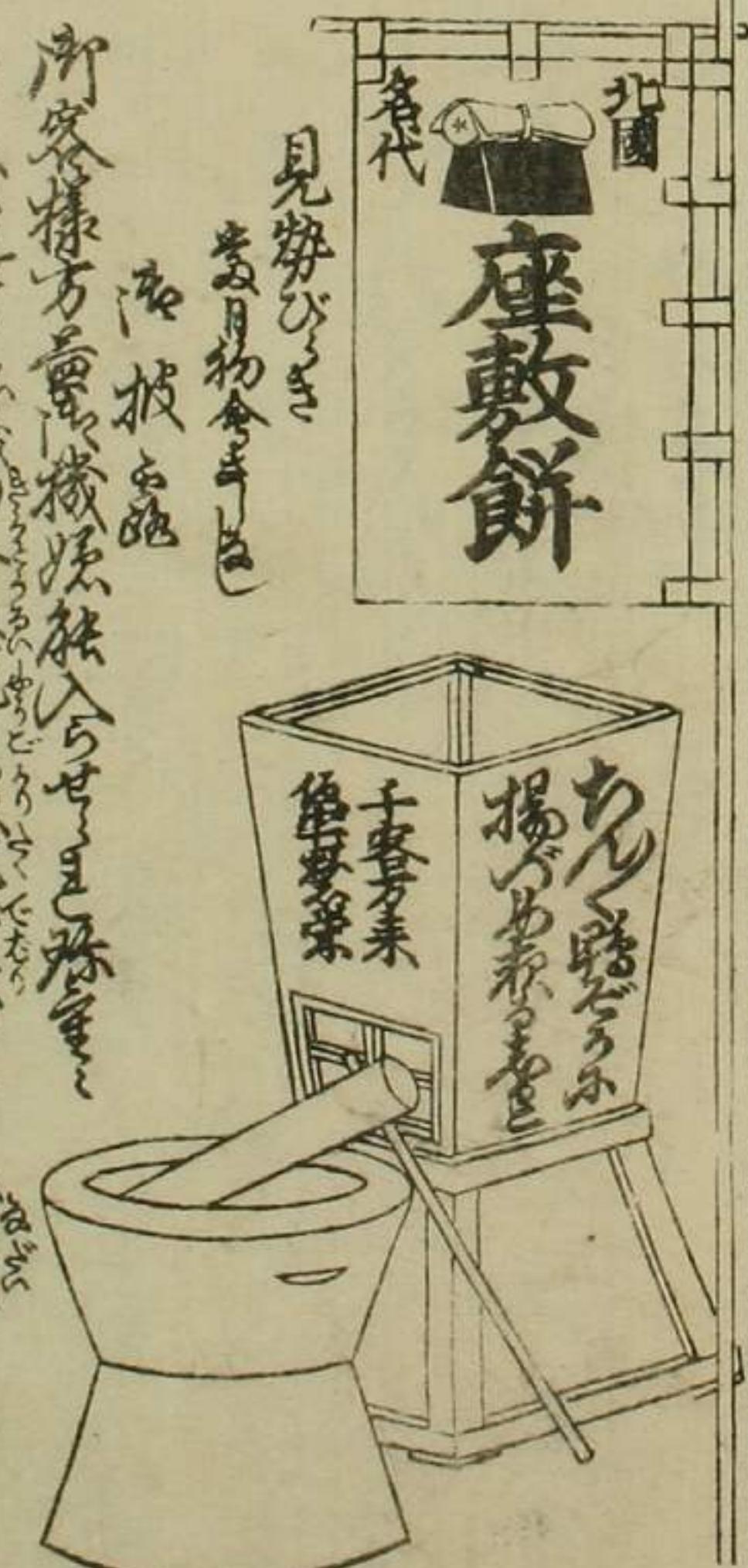
八百萬石方店へからまづのへと高の山を経て又とやし
准よこまから又とあづと山へと云ふ山と合泉と名づけた田舎や
敷の中貴機銭集の先づたは戸の先ゆに枝ゆのすば静
室の居候く地心がむねうだりつこのか屋敷ふ邊あか至近心急御
御慈悲の北敵ひ備せ神ごそ招神をちくく幕避難御足あら
じう永ゐ東方也恩負せのものどうなごもえも忽れさるり
あけく也重一私じざめく万歳乐相樂取て暖焼かれと
も、致て象の曲りとあさうもありませんり

三河萬歳

得、當、
店の新
六、
着く
之を
遣す
ある
きん
來こ
跡跡記
と計
小判
八百萬石方店へからまづのへと高の山を経て又とやし
准よこまから又とあづと山へと云ふ山と合泉と名づけた田舎や
敷の中貴機銭集の先づたは戸の先ゆに枝ゆのすば静
室の居候く地心がむねうだりつこのか屋敷ふ邊あか至近心急御
御慈悲の北敵ひ備せ神ごそ招神をちくく幕避難御足あら
じう永ゐ東方也恩負せのものどうなごもえも忽れさるり
あけく也重一私じざめく万歳乐相樂取て暖焼かれと
も、致て象の曲りとあさうもありませんり

卷之三

モリモリ身自尊
ノ威をもと乗じて強め
せどもまことゞしの瀧方安食あつてのわ
おじきぐみるぬ我ふ
えまめりでせうまは
ひともやよりうみく若げみ縫
麻の补けげなりくお仕度のし
朱あり月六奉日 燐藻江内町
火先寺江内
川根ト
あらまく
おんぐる
一
を



源内七端所
張宅屋賣出處
主之言
利盈財

地震火災

やくもひ

アラセツカハシテ今ぞん今宵の天災を神の力でそよひませう
十月二日ニテ日町並も門をみつむリ三國一夜のその因ふ土産や祭社
不夏の山かるうたれ木相生の松たをゆ松たを飾り立てる諸方堂を
か壁の外へねとび壯宿する身の若の病ひ五七ヶ雨とありかる尾や
石の因ふ木をさきづかあらる燒ゑの臺座移づどん自身番火の
用心や身の用い春あらる神ども皆人の一方歳乐とうじもあかそへ
柱も龜口のあめでづくる人の山これも世率一出雲うら立也てな
神くのあまかあらる芦糸皇國千代み八代小要石の般若寺をうて
苦の身こるが如神代をそがくび又りや御をうだつけてねくらり
ねくらりと三々く鹿縛を初さば麻縛の神の名代みほすあきが
おまつは高天ノ原をうちにしてみもそそ川(まわり)く

焼るまき木竹子下す一竿一ニ丁月寄田勘孫宅より少方至天模丁東へ移る△又
一只至多一丁小糸通鑑院並裏居てぐ焼る日西義の内物觀物をあう松百根
ある川あず六四丁九百根山の寄丁よりやけに一束一束例めり又ようあ方を川ナ
丁ナ次長余數百根を川ナニ丁大門をさ者妻楊陳までやる

△焼るまき木竹子下す一竿一丁

一金卦糸ワ

月内

一白朱ニ升ツ

月内

一味喰汁上持リ十月九日ト毎日投入

月内

酒屋

一味喰二枚 楠干四十枚

月内

酒屋

一絲十貫文

月内

酒屋

一津房十枚

月内

酒屋

酒屋

浅草寺境内に觀音堂西の破風

大の木損失五重塔九輪ある

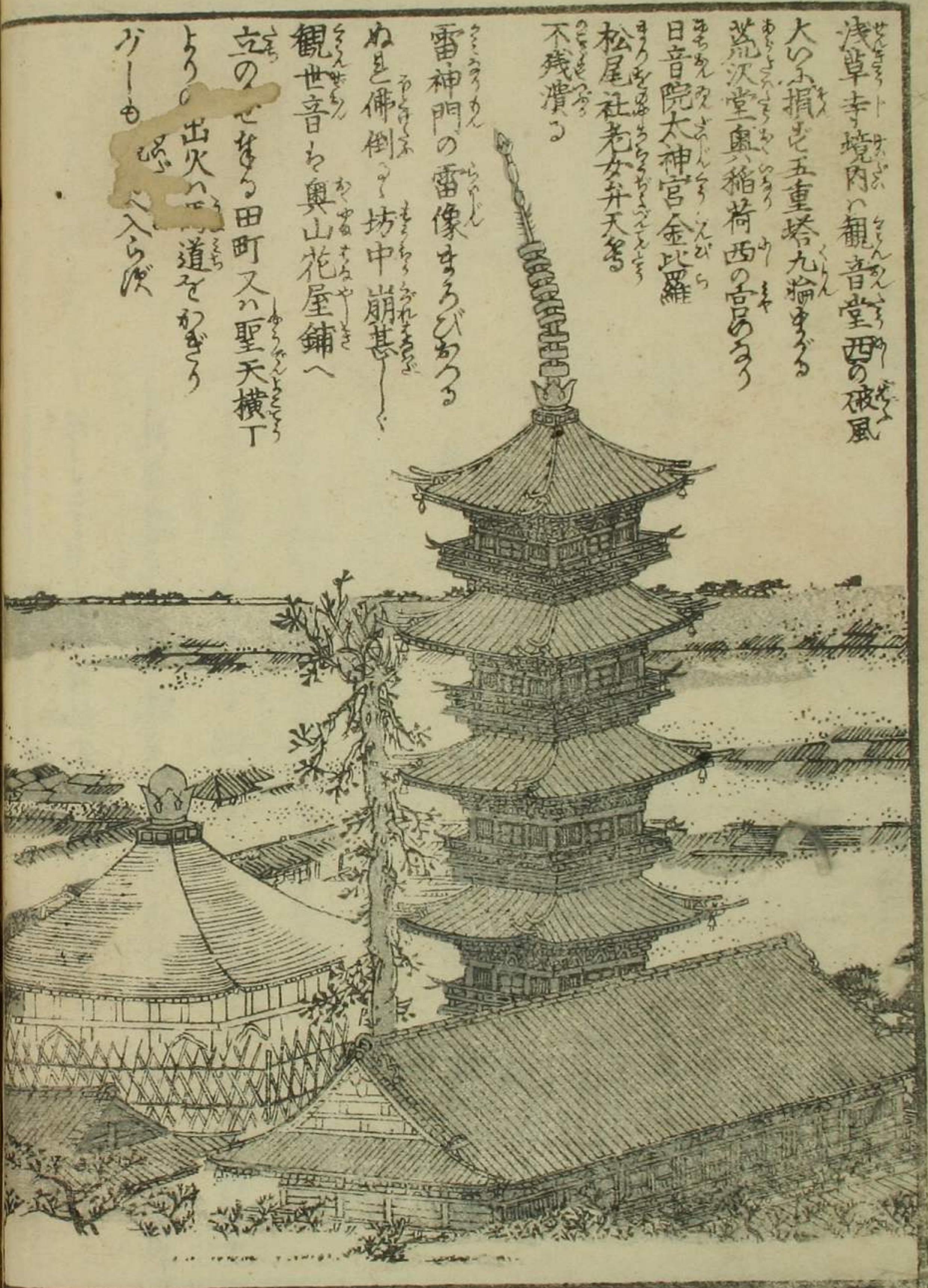
荒沢堂奥の稻荷西の宮あり

日音院太神宮金比羅

松屋社老女弁天等

不残潰る

雷神門の雷像まろびあつる
ぬ色佛倒り坊中崩甚
觀世音も奥山花屋鋪へ
立のせき田町又ハ聖天横丁
よしの出火ハ馬道をかぎ
ケーモ入らば



一 細七株立貢文外業漢十五株

日加神丁本物
口人

久布萬
次三清
黑木

一味當十株

日加神

あの倉
安吉郎

一 葵月代壹万八千人分青麿入

日加神丁一丁目

葵精
半常

一 沙六十茎又

日加神丁

吉世
半常

一 緑紫川向米卦拾壹俵

日加神

大護院

(共) 沈落のあ東海仲丁革木丁竹丁竹木丁大破換處多々一日も方泊取
銭高坐あ方り焼る日不約於丁初宿さとく料理日も方りあ例あり
候候丁走の内神やる事無丁兩例若中清水揚糸やける日つある若中八
丁代地、好丁止る御河省波口生で燒る日不約例極むつあ候る是ゆく止る
此度生々々大破換處多々一日不約商方振舞丁農田丁口身あ天主楊天王

丁尾丁身丁木大破換右町、あ裏雪うき外爲年一日も方柳格故玉吉川丁身
魚之木大破換、福井丁久を丁身破天文鑑、二筋丁小楊丁、二筋丁田原丁木大破
法家^{ナガ}、二法極佑竹換春形破換比里方武家町家大破換七曲ウ迎局不多く
△沈落あ方そ物名城か後換とアシ商方学やも幸也、幸也幸也房坊
破換日焼ち天無院東光院日つあ丁海深山下谷山傍丁毛武家町院町家左崩
竹多一一日不陀肯左金誓教^{トヤラ}沈落破本丁沈落丁大破落不多く^{アシ}商方吾德
も魚深も涼^{トヤラ}也源定も本堂^{アシ}東本領も深地大破落不多く一日不備^{アシ}院つ
あ丁木破落法家多々一燒失日あん

(共) 乞狗山本仁右支

接付一下余純^{アシ}東本領も本堂^{アシ}破換傍房大破日

田原丁口裏^{アシ}日あつ浅生^{アシ}中之院^{アシ}萬^{アシ}木大破換東方燒失日あん

(共) おち丁を馬屋檜^{アシ}方も好妻^{アシ}木^{アシ}つち丁二十燒^{アシ}日向側^{アシ}燒^{アシ}日あん
燒^{アシ}日^{アシ}丁^{アシ}幸^{アシ}也廣大^{アシ}東幸^{アシ}大破換日つあ丁^{アシ}幸^{アシ}也^{アシ}日^{アシ}所

而光あ而照あ下谷过番中込木大下筋（日）而方承照あつて丁宗源ち日つあ丁
度徳あ下谷車坂丁少芳武家法院町家木大小宿生演不_{（ノ）}と記一_{（ノ）}

△入谷庚申産小方正寛ち良源院木大小宿徳碑木立札をニ崎橋爲日不
全松上丁所徳も坂本東寓丁要うとひぐく爲る

一金二十支義之分 指丁四万ヘ総一 上都东丁

泉井九多湯

○其下谷山傍丁武丁月は切毛丁焼る月坂本丁より是丁車坂丁より家主
のあ丁と紫野附畠木大木燐

△上坡東廠山寛永寺本堂奉先物主ち宮泰平日不火除地宮様よう
内殿・屋建能り人なき也

一金みぬ 琵琶岸指又傳

上鹿小弓丁

居酒後世

一弓端

古

一織武指雲文 外之下弦而置

日膳川中尺

其泉室

若云湯

一毛拭毛筋完牛一人少

下谷古弓丁

春美房

勝云湯

○上豐太孫一吉廿年余三十五年 輪屋^{（ノ）}森家^{（ノ）}大極屋^{（ノ）}庄玄^{（ノ）}家
此中處^{（ノ）}入一葉子武石草^{（ノ）}繁 蒲草西仲丁 横屋^{（ノ）}安左弓

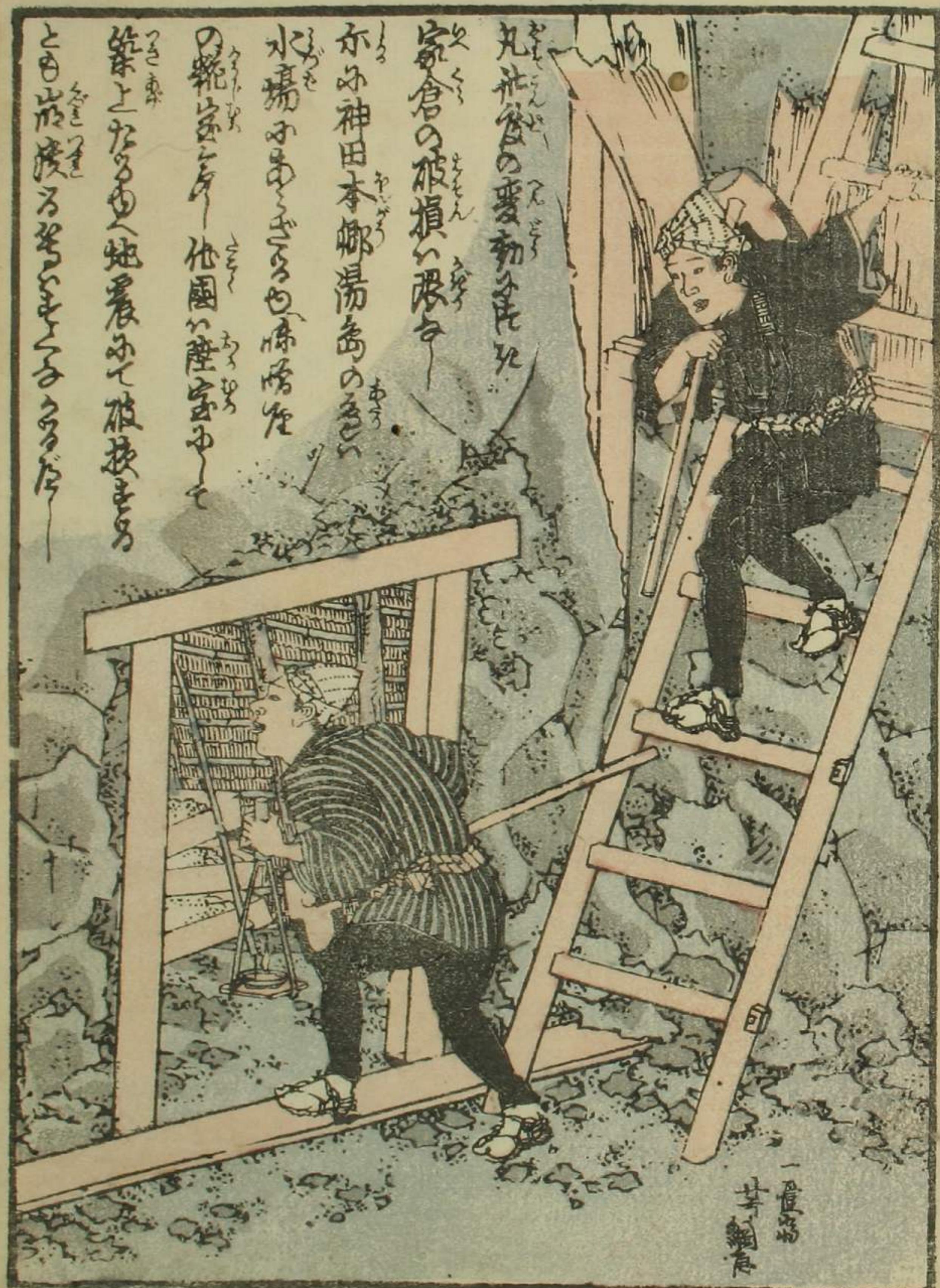
三 上坡度廣小路考樂ち六所公院室南方^{（ノ）}曉摩利支天櫻丁より坂丁喜平日
武丁日燒日不東方十番月明丁^{（ノ）}二丁日不續^{（ノ）}と上坡指印^{（ノ）}至二丁日不續
度廣下谷車坂丁勢代太^{（ノ）}丁^{（ノ）}大^{（ノ）}丁^{（ノ）}喜平日不續
日西^{（ノ）}大^{（ノ）}は先^{（ノ）}考^{（ノ）}喜^{（ノ）}二丁日東櫻丁^{（ノ）}と^{（ノ）}有^{（ノ）}別山御發授^{（ノ）}來^{（ノ）}木丁燒る日
度廣又日不南方^{（ノ）}考^{（ノ）}喜^{（ノ）}二丁日東櫻丁^{（ノ）}と^{（ノ）}有^{（ノ）}別山御發授^{（ノ）}來^{（ノ）}木丁燒る日
小笠原^{（ノ）}家換中^{（ノ）}喜^{（ノ）}木^{（ノ）}大^{（ノ）}被^{（ノ）}換升上^{（ノ）}荒漫換^{（ノ）}上^{（ノ）}や^{（ノ）}東^{（ノ）}少^{（ノ）}方^{（ノ）}爲^{（ノ）}火品^{（ノ）}
新燒^{（ノ）}毛^{（ノ）}或^{（ノ）}家^{（ノ）}町^{（ノ）}大^{（ノ）}被^{（ノ）}換^{（ノ）}大^{（ノ）}被^{（ノ）}換^{（ノ）}又^{（ノ）}内^{（ノ）}喜^{（ノ）}一^{（ノ）}不^{（ノ）}燒^{（ノ）}毛^{（ノ）}
△谷中一天主^{（ノ）}中奉事、^{（ノ）}大^{（ノ）}被^{（ノ）}換^{（ノ）}九^{（ノ）}猪^{（ノ）}玉^{（ノ）}於^{（ノ）}ある日^{（ノ）}有^{（ノ）}移^{（ノ）}至^{（ノ）}丁^{（ノ）}日^{（ノ）}而^{（ノ）}方^{（ノ）}
至^{（ノ）}林^{（ノ）}の^{（ノ）}丁^{（ノ）}日^{（ノ）}少^{（ノ）}方^{（ノ）}物^{（ノ）}備^{（ノ）}遊^{（ノ）}院^{（ノ）}向^{（ノ）}御^{（ノ）}大^{（ノ）}祭^{（ノ）}日^{（ノ）}不^{（ノ）}天^{（ノ）}主^{（ノ）}の^{（ノ）}有^{（ノ）}丁^{（ノ）}木^{（ノ）}大^{（ノ）}被^{（ノ）}換^{（ノ）}

不善多々一△不善池安天社を美濃内破被燒者社地ハ池中孤島宣吉日不可
方ハ善き據傳く一とと善池の端生モのるハ善不善多々一

世二池の端仲丁は毛景據傳く一と家庫とも安休うづか一 稲里下毛仲一
あ車燒失を起居然遠々有るハ善不善一を毛方の多く為△日西寄丁
臺丁同卸丁日膠橋高先で燒る件一 あ方本車燒は模山外構安ちつある毛
東方池の橋沿サケル△日少方根津桂現社内可一破被燒

世三根津桂現本社金美濃内可一破被燒日セリ丁ニ燒る此毛町毛萬示
多く燒失日あん日西勝里毛勝あド丁桂吉坂邊毛可一破被燒景多一

世四谷坂本丁臺丁日大破被燒二丁目よりあ割燒高方なまの善篠丁と燒る善
照間水ある毛止る高方ニ丁目接西軍寄丁高方毛戴陽毛燒る也方ハ日軍
日燒る△日西東敵山口屋地日毛高事毛毛善院永善毛千歳院要燒も日あ
方毛引松の切毛大破被燒毛日あん△全移切武志方小高安民家とも



江戸の経済の発展と一層の
一層の開拓

中もこの十日たつては、方生懶のまゝで

土の下を穿て、又天井の模様を

防護を爲す事よりは土を運んで他人の地に

さかふ画うそど一 おみ今昔のむらのびととい
まこと

桂東零忙之子易別名震動

あらゆる事に迷ふ事なく、たゞの如く

何等偉大が如きを描出する

中より最も美しいの世にあらず

○本以繫所之家不九朝後甚中之而廢

彦三郎の口をもじるにあつて、彦三郎の口をもじるにあつて

日下後板板七射後日暮木丁二日

卷之三

同上。丁酉夏月。吳中行。

一九四〇年夏
王國維

日光町又勢○湯島天神門弟

尺勅。因植木于一廟。因三姐丁一廟。

同六子自二廟以歸

卷之二

○神田駒林苑二集

あか町あかまちお丸まる

名前もわざと宣ふる。

卷之三

老手の筆



○愛水草野

新町水三河性彦と

少人あり而後後世まで最繁昌

あらへ其妻よし子の右二日夜

家内皆麻衣の両方の男子す

小夜三更と遊ぶる所す

在地春ふて阿那と秋葉の西立込

とまゐ大辻の裏筋強して左枕室因

穴の下へ滅ぼとまつ女と小四と相手停一ま

喰て度々多是小秋また多出で人を立

豫て板とまゐはもの去前後打掛の根

きく嚴卷し右たまる写夜なみゆく

猪のしづめ余跡に止ざ松をさ

さかみとう乳船などと左隣古中と

極せきく右をすせひ小四の足と疏

ひづけ母子共叶ふ又變死年

度まひ更ふかねやと

樂歌の個ふむせひ变葬どる

う天井と作寒小缺小余あ

め飛鳥と氣其絆れの甚美とおなへた

精室の底う西へ九月と櫻と今往來せむと



△根津七郎丁の属坐みて車夫とひものせまわら娘ちると云々今年十上者ゆく
妻母へ跡づらひ十室方定ひておもろくを今より考む際を五年に及んで
船をかへて我の船をうきあまをもとめひは客様のものか一月をかねて改め今す
まへてはおれどもおまめを考むてゆく船又我ほひて其船うちの娘をめだて賣去
放逐か一月金をもとづくる由へ船もすつと一月をかねて改め今す
被事と食ふ西洋船をうめりせゆづるは船太郎辰年若方へ一月をかねて改め今す
船の下を乗じて隣が大笑船と若娘並うて拂ひたるは家とあるゆゑ安金は是事へ
樂子をかくと御舟を乗つてせせつと不笑を徳天王の戒めにて忍べ一月を

△船萬松車坐雲寺櫛は木の塔第より史家や舟体入難翁あらず不笑工二十日
より根津七郎丁を一軒ふ由来三ニ計一金を西洋船に改めあり天候の辰に始めて
の窮民かの板を身につけ町家ゆてもあへあまく人へ甚由ふむをばとく
致あり船の燈へ一船万俵といふ梵天帝教甚天の五色護摩る所く

乞者と燒失ふゆじに△引丁の新屋と大破被換ち考ふ船生まくゆじに

△裏船をとふと表船済くん居まく焼失のゆじに△蒙津川寄里ふ船本因幡と
大破被換船不か一△深井東野船を大破被換あまと船不か一△玉手桂櫻等
船を△社を奉仕す矣燒肉被換あつ艘繩を元町を生て被換ゆ

△湯沸天神社船萬根被換主外ゆもあつ△妻無船為燒肉被換焉處
△神田明神被換あまと船列のところ一△日不達御換上中御内御事度
よ居あたる者を家船を外破被換日不達御事度日明丁令波丁近武家町家
大破被換船不か△湯沸を立丁目を表側のうち被換主を船列のところ日不
櫻高場を武家不船があつ日也方令駒丁奉本丁邊大破被換船不か

一 沙三拾貫文

四千四百貫中當と記す

湯沸立丁目

ほの舟
九月湯

一味當五十枚

全幕當中當と記す

湯沸立丁目

新章

向來未外之全集也。沈西門一耶人

卷之三

卷之三

世五水乃橋より小石川の御大被換、
水戸候泰平は二方武家町家の水爲れ
津家事一日雨あらず麦稭東方先世中板協牧
谷堀川底土余焼
此を名武家之被換日下裏方町家爲而有之多々

世六 天界下幸丁焼る△鷦鷯院本幸多
被換日而處之近者幸多一
音羽獲持院大極毛之被換渴幸多一水幸多
被換△日向不動△後絕
坂幸多幸子雜司若丁近幸のる又被換水幸多一△雜司若
鬼子幸林幸多幸多日而處之被換△幕山法師近居地被換縫石幸多一
幸多一

金身の邊に坐まつてゐる。あつたとみぬ。其の處でさうじう右十月二日午刻
近きの人に告げておまへ今夜もあくまでも天更あらん何事もやうて老と近きを殺ひ
安食の處へ立退くといひ其状と尋んと止む。人と別退て倒遊ゆ。行方を
ぞり。因立をひきとひかわと五行舟をまく。舟の体とえて船客店、船はまの
飯を食ふと倒て食すと立廢ぐるやとあつて大み被ふる。其夜宿地裏有へ
あはの舟を始てさまで後悔せ。人の家にうとうと寝又北辰もびきりて後もよの
船懸の家が遠ざかる間ひまづ余効も有るまんとひるとほへばる人を安らかに
あく程又所の火焚も有へても。山家又い頃する所うつあわ家放きとわゆ
廻廻子もとよどり戸を取る所とあり。世の多めと凌のこみて人を施ゆる者
を多のあらわすうち被れ度き度き度き度き度き度き度き度き度
れ悪のあはれふ良やハ竹所、直引と同く御矣して元修のあらきをひくと
安堵とも家とれ無事あると云ふ家業をまへる。亦未だ船も脱てえの舟とゆること

奉迎而假丁度將軍とひりあひ人吉宗大主の在御門とあへ難い程
お及ぶるものうちを有りかみみておせむ事も要るの体裁へうなずき日は
は所善圖寺の昆沙門を侍する也。奈侍へ其序稱ふ一人旅宿がましに何ら
身と身ともへ一々の所と多く。どうじ居示て曰足下今革令の相あつ絶て法
事と最不祥と云ふ佛。獨何ゆ。是を税んと云ふ傍旨曰足下は神佛と
身体ゆ。もとをせん。案止す。とたゞ化りまゝり五無拂更に及ばざ席毫毛す
尔。汝ゆ。拂紙車と云ふ一札を画て歸宅。右たゞ見る程。申ゆ。出まで後革
いが多矣。序言がとを先取れ。又。紅酒。事。一。被。簇。ま。る。ちや。史。刺。や。の。威。一。ぐ
不。假。傍。の。事。一。と。と。ひ。出。順。と。告。す。云。き。也。切。ふ。止。れ。共。終。す。ま。と。立。出。す。を
と。有。す。右。拂。表。みて。大。ふ。歎。じ。う。き。ま。の。う。と。大。ふ。歎。の。う。ふ。歎。お。そ。そ。見。記。甚。爲。
や。ま。の。歎。ト。き。ゆ。ま。お。そ。そ。送。ア。大。馬。鹿。近。易。本。き。也。川。か。ス。人。と。教。出。一。う。ひ。夜
ゆ。ま。の。歎。ト。き。ゆ。ま。お。そ。そ。不。名。儀。子。今。と。税。う。き。也。公。の。他。あ。ま。今。

△紀亭より人来候と極み一交歎辛戌の一夕候ふ弱迫向山下ある宿を尋ね
丁雅吉即年十月二日より宿み二階の板戸と改せんとてとうづきに歸り有て
板子を下さうすあはゆやくすう今宵定て地主の轟きをあつも寝動を下う
らん お膳取るときぬひゆの宿と不祥のみと云ぬる所せよ床下よと
灯あともと其後又有るか累てを夜の火焚ふ家食と被換へき家内事
あて身を脱き一月寒あつゝ一月七日の朝身を雪にての廻りる家とより
縁ひびきのまほの家戸に入て各安堵せう彼丁雅のものと云ひ出でて
よりみ一々の由と考るふうとも説くもひ其丁雅と名を尋ねて丁雅と云ふ
僕の父の信列のちかてちみ禁るゆきをまう關係の時也あんまり日の方ふ
西あふる雲霞のあくたびら又東のあふ甘露のゆき雲生すも夜宿の
天地を震えぬ事ふえのじたま東西お出うる風吹拂過るんと被まとえ
天地を震えぬ事ふえのじたま東西お出うる風吹拂過るんと被まとえ

東方と佐さとを立てまつてと被二日かまく雲の巻きとるのみがとぞ
やへとくとくとくねまろい事。轟と轟ト堅固に巻簇を固とも俗絶も難べ
きめあらそ況々実地の根従を堅めゆき功の者とぞそきのよびだ
△甲列の経賈人候共とくとくと十月二日中仙道熊谷宿とみて江戸へ入り
んと遙ととよとく其日行と命とも詠次も累どうぞ涌か宿めて日へ吾
け主ま家業の詰合あゝとまきに通中そひそき萩宿板橋かもおもとて
鶴聲が凹すをあうしはり更別やうそむき遙とりそぐ而ふ北風のあより
あらかうきて黒いの中少青光りあゝの烈風のあとてひゞきよううる
きうるうち少忽動搖の音をあぐれく恐怖と地とふ倒くる翁大蛇
震ふて主の家余の筋筋とく實少又驚も引裂うとしづきくあくと
夏のとく更少筋度をあくざるとく壯多くい地震の筋兆あくんう
ちとほ客の室中とゆうの淺まみてのそろくおき日ねうあくを

